

読書アンケート

同様の発見。五十殿利治編『「帝国」と美術——一九三〇年代日本の対外美術戦略』(国書刊行会)。

のユートピアへ(名古屋大 学出版会)

◎勝盛典子『近世異国趣味美術の史的研究』(臨川書店) どうしたわけか日本ではア

フリカの同時代造形に対して、著しく関心が低い。①は20年にわたって現場での取材を重ね、各地の藝術家たちと親交を重ね、日本で何度か重要な展覧会を企画した著書の軌跡を集大成した。展覧会場設営現場の興奮溢れる臨場感、現地での熱い交流のルポルターージュが精彩に富む。

◎欧州近代を特徴づける学術アカデミーの生成から近代科学の成立を解剖する。生命論や認識論にも専門的学識をもつ著者ならではの歴史研究。昨年邦訳されたナタリー・エニック『芸術家の誕生』(岩波書店)との併読も有効。

◎岩波書店との併読も有効。藝術家と科学者、官僚と技術専門職といった職能分化と相互依存は、フランス大革命直

前の時期にどう社会に作用したのか。今日いうところの「社会的有用性」や「経済」といった観念は、いかに発芽し変質を蒙って現在に至ったのか。その原点を問う問題意識は、今日の知の閉塞を打破するうえでも貴重。

◎著者長年に行たる博物館の現場での研鑽を集積した。歌川国芳の「忠臣蔵十一段夜討の図」はニューホフ『東西海陸紀行』の腐蝕銅版画の「パタヒヤ繪畫の館」の図を換骨奪胎したものであった。縦横の種明かしは著者のお手柄。浩瀚な本書には、原資料の丹念な精査だけが約束する知的感動が横溢する。阪神淡路大震災後、指定管理者制度の導入なども相俟って、旧来にもま

し、理不尽な悪条件が本来の博物館活動を圧迫するようになってきたという。この現場からの訴えは、それが控えめ

ただけに、万鈞の重みを持つ。

稲賀 繁美

文化交流史

①川口幸也『アフリカの同時代美術——複数の「かたり」の共存は可能か』(明石書店) ②隈岐さや香『科学アカデミーと「有用な科学」——フォントネルの夢からコンドルセ